

ビデオ・チャット？
 なんでえそりゃ。
 生身のコミュニケーションもできねえく
 せして、
 テレビ電話たぁおこがましい。
 いろいろ言ってますけど、
 型落ちゲーム機の廃品回収ですから～。
 残念！



第7巻第6号
 通巻第78号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
 からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

「口裂け女」の話を知りた方は少なくないだ
 る。世に言う都市伝説の一つである。日本では
 随分前に鎮火したように思うが、お隣の韓国で
 はマスクの色を変えて今が旬だという。一体、ど
 ういう経路で伝わり、今頃になって沸騰している
 のだろう、と不思議な気がする。ウェブをざっと
 検索したところ、一九七九年の岐阜から始まった
 ものとする記述がいくつかみつかったけれど、こ
 の界限では七十年代の前半には「口裂け女」の噂
 が存在していたように記憶している。発祥の地が
 どこかは定かでないが、子どもたちの間ではもっ
 と前から流通していたことは間違いない。
 テレビや雑誌で取り上げられるようになったの
 を見て、あり得ないような噂なのに、内容のずれ
 も少なく広範囲に渡って伝わるものなんだなあ、
 と驚いたのを覚えている。小中学生の口コミの力
 も馬鹿にはできない。当の私がその話を誰から聞
 いて誰に伝えたのか、あるいは、誰にも伝えな
 かったのが、三十年以上も昔のことなので判然と
 しないけれど、ネットや携帯のない時代であるか
 らして、口から口へと地道に伝わっていった筈で
 ある。よくぞ、あんな馬鹿げた話が全国に展開し
 たものだなあ、と四十半ばの私は思っつけ、小
 中学生にとっては強烈な印象を齎す物語だったの
 だろう。

噂話に限らず、情報を共有する関係というの
 は、年齢に依りて、広がってゆく。例えば、私の

今日の紙面から

- 二面 建築面)
- 観葉植物
- 四・五面からすライブラリー)
- CD 『ヴィラ』ロボス 弦楽四重奏
- アート『難波田龍興展』
- 映画 『ミリオンダラー・ベイビー』
- 六面(ラウンドレポート)
- 過ぎて行く時間とカメラ
- 七面(語面)
- 六月の英語

場合、最初は家族間だけのものだったものが、
 幼稚園、小学校、中学校とどんどん規模の大きな
 共同体に籍を移すのに連れ、共有する相手も範囲
 も広がっていった。塾やサッカースクールなど
 の系列の異なる共同体に関わり、範囲だけでなく、
 質も変わった。それだけでなく、成長に応じて文
 明の利器、例えば、自転車やオートバイを手に入
 れ、電車や電話や郵便などを利用する技術や経済
 を身につける。空間はそうにしてどんどん拡
 がっていったのである。今の御時世であれば、こ
 れにインターネットや携帯電話が加わる訳で、そ
 の速度においても範囲の広さにおいても、私の幼
 少時とは比較にならないだろう。先日、うちの
 前の広場で、小学校低学年と覚しき女の子が携帯
 でががが電話していたよ。何とも凄い世の中
 はないか。

私の生活に於いて、コミュニケーションの多
 くの部分をコンピュータに依存している。加えて、
 電話が幾許か。対面しての情報交換の相手は、家
 族以外では、近所のごく限られた人々ぐらいのも
 の。コンピュータがなくなったら大変でしょうね
 というような質問をされるのが偶にある。なくな
 ったらなくなっただけじゃないよな、手作業
 生活に戻るのも悪くないよ、という程度に考えて
 いるのだけれど、いざ、コンピュータが壊れてみ
 ると大騒ぎして次のマシンを用意してしまう。こ
 れを文明に毒されていると言わずして何と言おう。

(最終面に続く)

からす新聞は××××
 が母体となって、世界に文
 化と芸術を発信すべく発行
 しています。
 誰でも自由に参加できま
 す(無茶じゃない範囲で)。



最近、私はたくさん植物に囲まれている。私の周囲で植物ブームが起きているようだ。私がスペインの仕事をしている渋谷の事務所では、たくさん観葉植物が机上に置かれている。エビプレナム・アウレウム、ユッカ・エレファンティペス(ともに写真1)、プテリス・クレティカ(写真2)、グズマニア・マグニヒカ(同3)、そして、パキラ、アスパラガス、スノーサンゴ、アロカシア、コリウス(同4)などなど。観葉という文字どおり、見ることで衣服の清涼感をあたえてくれる。それよりも、植物に水をやり葉をなで、今日は新しい芽が生えてきたかとおぼろげに観察をするそのひとときが、ひとを優しい気持ちにするのもまた事実である。さしずめ、家の中でねこと遊んで、ほっとした気持ちになるようなものだ。植物の名前はラテン名で覚えようと企てている。これなら世界共通、スペインに行っても話ができる。ただし、気候が違うのだから必ずしも同じ植物があるわけではない。名前は、分類によって広い範囲から狭い部分へと、目、科、属、種という順に並んでいるので、例えば日本の柳が *Salix* というように、科の名前くらい知っていれば、そこそこ結構な話はしやすい。余談だが、動物の場合は、これが7つの分類名で、界、門、綱、目、科、属、種となるようだ。人間は、一方、自分の事務所に行っている団地では、庭の雑草が伸び放題だ。四季折々、自然を豊かに感じることができると、毎年この季節には窓越しに緑がよく目に入る。事務所の床は、地面より五十センチメートルほど高く窓の下半分は曇りガラスである。草は窓のすつと上まで生えているから、彼らの背丈は青々と優に二メートルを越え三メートルに届かんとするかもしれない。生い

茂った樹木ではないが、庭に踏み込めないことを考えると、ジャングルという形容がなんとも似つかわしい。葉はつややかで、心なしか肉厚であり、背のびかたには勢いがある。窓際に育った芙蓉は、若々しく赤い花をいくつも咲かせている。何年にもわたって培われた無農薬で有機的な土壌が、彼らの成育を促していることは間違いない。来る年も来る年も、どんなに雑草が疎ましくても除草剤などは一切使わない。子どもはのびのびと育て、と言わんばかりに、雑草も伸びたいように伸ばしてやる。実際のところ、手間を省いているだけかもしれないとわかりきったことを自ら問うてみる。しかしながら、季節とともに、あるいは必要に迫られて、彼らを伸び放題しておくわけにもいかなくなるのもまた事実である。ある年は自然に枯れ朽ち、またある年は、伸び放題になったジャングルは人為的に刈り取られる。しかしながら、いずれにせよ彼らの遺骸は庭のフェンスを越えて運び出されることがない。その結果、秋になり冬になるにしたがって植物のからだは分解され土に還り、庭土に豊富な有機無機の栄養分が供給されることになる。圧倒的な緑のポリウムを形成していた豊かな元素たちが、そのまま庭の囲いの中に残るのである。毎年毎年、五年間、同じように土壌改良が続けられているのだから、いろいろな元素が混じりあい、やせ衰えて見るも無残だった庭の土は、豊かな栄養を持つようになつた。おそらく畑の黒土と比べても見劣りしないだろう。地中には、だんごむしやみみずが生育し、多種の菌類、バクテリアなどが成育している。地中にはセミの幼虫や、そして草むらにはやもりが成育する。彼らがまた、有機物の分解を促進し、食物連鎖と、微妙なバランスの取れた生態系を成立させるのだ。

(篠崎健一)



1



2



4

3





ミリオンダラー・ベイビー (Million Dollar Baby)

2004年公開 (アメリカ)

監督・音楽：クリント・イーストウッド

出演：クリント・イーストウッド、ヒラリー・スワンク、モーガン・フリーマン

第77回アカデミー賞4部門受賞 (監督賞・作品賞・主演女優賞・助演男優賞)



Films



アカデミー賞の発表があるまで、日本ではほとんど宣伝されず、4部門も受賞した途端、慌てた配給会社が公開時期を決める等ドタバタだった作品。イーストウッドと言えば、筆者の世代だと「ダーティー・ハリー」シリーズが印象深い。71年に「恐怖のメロデー」で監督デビューしてからは数々の制作と出演を同時にこなしてきて、92年の「許されざる者」でアカデミー賞・作品賞・監督賞・編集賞などを受賞した。今では、ハリウッドの巨人の一人である事は間違い無いだろう。今回イーストウッドが手がけたのは日本の配給会社が当初は見過ごしてしまつような地味な人間ドラマだった。名ボクシングトレーナーとしてジムを経営していたが、過去にボクサーを壊した経験がマツチメイクにも影響し、手堅いカードしか組めないでいるうち

に着板ボクサーにも逃げられてしまつ。そんな中、女子ボクシング界での成功を夢見るマギー (スワンク) がどうしてもフランキー (イーストウッド) に弟子入りしたいとやってくる。当初は嫌がっていたフランキーもとうとうマギーを認めてトレーナーをする事になる。マギーは連戦連勝を重ねて行くが、チャンピオンとの対戦で悲劇が起こってしまう。そしてその結末は……。「許されざる者」の時と同様、脇をモーガン・フリーマンが固めており、助演男優賞にも輝いている。フリーマンの演技は見応えがあり正に名脇役と言えるだろう。イーストウッドの演技は良く言えばどの映画も一環しているが、悪く言えば代わり映えない。もちろんスワンクも派手さは無いものの、三十路を過ぎてボクサーを夢見る女性を演じきっており、主演女優賞受賞に

も充分納得が出来る。特筆すべきは、今回の作品で音楽監督をイーストウッド自身が努めているところ。その辺りも注視しておきたい。オスカーを取ったから言う訳では無いが、巨費を投じて特撮を駆使する映画が多い中、地味な中にも映画作りをしっかりとやっけていて上映時間を長いと感じさせない作品だ。かなりの「秀作」と言えるのではないだろうか。余談になるが、以前、イーストウッド本人を見かけた事がある。実物は大変カッコイイのですよ、これが。同様にジーン・ハックマンを見た時にも思ったのだが、やはり彼等は独特のオーラを放っているんだよね。二枚目の路線とはまた違うんだけど、何とというか、やっぱりカッコイイって事だな。

(小張寅僧)

『VILLA-LOBOS: String Quartets (Complete)』

Cuarteto Latinoamericano

Brilliant Classics、2004年、6634



ヴィラ・ロボスの全ての弦楽四重奏を集めた六枚組。ブラジルの作曲家の作品をメキシコの演奏家たちが奏でる。聴いている私は日本人。弦楽四重奏という形式を見るだけでも、土台にあるのは西洋伝統音楽であることは了然としているし、実際、耳を傾ければ、一耳瞭然のこんこんちき。クラシック音楽というのはそういうものなのである。そういうものなのであるけれど、やはり、生まれは隠しきれない。耳を澄ませば、ここで聴かれる音楽の中には南米の香り……西洋にとつては明らかに異国の香り……が嗅ぎ取れるはずだ。

さて、六枚通して聴いてみても疲れを感じずにいられるのは、善いことなのか悪いことなのか。

(全太)



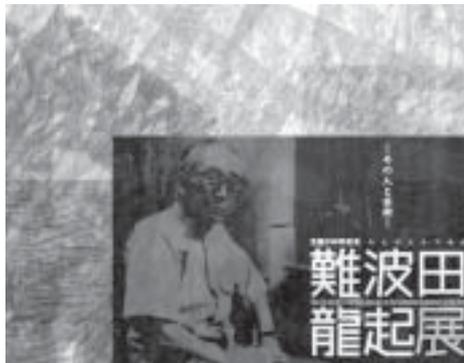
生誕 100 年記念

難波田龍起展

その人と芸術

東京オペラシティ アートギャラリー

7.15 [金] - 9.25 [日]



前回息子の史男を紹介したが、丁度良く、父龍起の展覧会が催される。
 抽象画家、難波田龍起(1905-1997)は、少年時代近所にアトリエのあった高村光太郎との出会いから、美術の道に進み、92才で亡くなるまで、精力的に絵を描いた。特に、次男史男(1941-1974)と、やはり画家であった長男紀男を相次いで亡くした後、その独自の画境を拓いていったという。

史男によると、相当「子供っぽい」人物だったらしい。子供たちとのチャンネル争いに対等に参加し、破れればいじけた。こんなこともあった。

3月29日 日(曇)

弟が金本のおじさん(母の弟)の家にスプリングコートをもらいに行く。

これには少々のおおきさがある。

50の坂を越えた父はまだスプリングコート一枚持っておらず、レインコートでその場をしのいでいた。ところがこの四五日になって急におやじ君は、なにながあってもそれを買うのだとだだをこねだした。母もそれに同意して、デパートに行き行った。おやじ君の念願がかなった。

これと前後して、(母の)弟から自分のが小さくなったのを紀男ちゃんにあげるからとりに来なさいと電話があった。おそらく彼はおやじ君のためでなく紀男君が買つのだとはかり思っていたのである。

弟はスプリングコート一枚 背広二枚 靴一足を持ちかえつた。

所が又してもおやじ君が出現し、背広は自分にも着れると主張し一枚自分のものとしてしまった。

なんと子供らしいことが。

展覧会では、同時に史男の作品もいくらか展示するようである。ぜひ行かねば。

(龍月)



少し寂しく思つのである。そんな風にして改めて時の流れに気が付き、風がほとんど入らない、少ししか開かない窓を恨めしく思つた。この感覚は、日本の夏にトイレに入つて座つた時の感覚に何となく似ている。クーラーの効いていない空間で、夏の暑さを肌で感じながら、じわつと滲む汗を我慢して座っているからだろうか。夏が好きな僕は、「暑いなあ」と文句を言いながらも、少し嬉しい気持ちで学校に向つた。今日は卒業制作展の初日。家族と友人の

ほとんど学校に来ていなかったクラスメイトも何とか作品を仕上げ、色々な問題がありながらも、いつもお気楽なうちの課らしく本場に前日の夕方に会場は完成。それとなくまとまつてしまつてところが素晴らしい。とうとう本場に自分たちのディグリー・ショーが始まつたのだ。あつという間だったのだろうか？ 初めて会うクラスメイトの家族と挨拶を交わしたり、知らない人に自分の作品を説明したり、他の課の展示を見に行つたりと、忙しくその時間をと過ごしている間中、感じていた。何となくお祭りが始まつたという喜びと、これで終わりだという寂しさが入り交じつた感覚。そしてこれから続いて行くのだろうか。

朝、家を出る時に、いつも使つていたデジタルカメラではなしに、もう何年も使つていないフィルム(使い捨て)カメラをポケットに入れたのは「終わって行く物と、これから始まる物が何なのか」何となくそんな事を、もうちょっとはつきりと捕まえて見たかつたのかもしれない。

一番上の階の、だだっ広いスカルプチャーの展示場の窓際で涼んでいた友達の名前を呼び、振り向いた所を「パシャ」と写真に撮つた瞬間に、遠い昔にやった文化祭の事をふと思ひ出し、使い捨てカメラを持つてきた理由が何となく分かつたような気がした。

こんにちは。さようなら。

この先、また何かが終わる時に僕は、今日撮つた写真をもつ一度眺めて見ようと思つ。

(神山)

過ぎて行く時間とカメラ

為のプライベートビューなのだ。

神戸支所近日オープン！

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。

あなた一人で悩まないでください。

ストーカー バスター

相談無料
秘密厳守

防犯用品販売・
防犯対策指導も
致します。

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

4-3-49-1, Suginami-ku,

Tokyo 166-0015, JAPAN

voice : +81-5347-9063

facsimile : +81-5347-9064

6月の英語

Words of June 2005

今月話題になった英語をいくつか拾ってみる。(望月)

Deep Throat(政府高官の)内部告発者

1972年、ウォーターゲート事件発覚。大統領による犯罪であることを暴こうとした新聞記者に、情報を提供した政府高官の仮称がディープ・スロートだ。同年に公開されていた、×××××を××に移植するというSFポルノ映画のタイトルの記者が拝借してこう呼んだ。先月末、30年以上沈黙をつづけた彼が、自らその正体を明かし、アメリカではかなり大きな話題になった。

それにしても驚くのは、事件当時も今回も、その明らかに卑猥な言葉がふつうにメディアで飛び交っていること。“Shit!”=「くそっ!」ぐらいはわかる。我々もその語源を意識して使っているわけではない。しかし、どうやらアメリカではそのぐらい定着した言葉であるようだ。ふつうの辞書にも載ってるし、英語のバイブル Oxford English Dictionary にも採用されている(以下)

deep throat,

a person working within an organization who supplies anonymously information concerning misconduct by other members of the organization; orig. applied (with capital initials) to the principal informant in the Watergate scandal

[after a pornographic film (1972) so titled];

ディープ・スロート

組織内で働き、その組織の他のメンバーによる不正に関する情報を匿名で提供する人物。そもそもは大文字 Deep Throat で、ウォーターゲート・スキャンダルにおける主要な情報提供者のこと。

[同タイトルの映画(1972)から]

もはやオリジナルの映画の方が全然マイナーなんだろうけど、でも、きっと子供に聞かれて困ってる親とか先生とか、アメリカにだって多いはずだ。

プリジュームド イノセント

presumed innocent 推定無罪

マイケル・ジャクソンの無罪評決が出た。裁判における基本ルールは「疑わしきは罰せず」、あるいは「推定無罪」。告発する側は、有罪にしたいのなら、それなりの証拠を示さなければならなかった。

sexual predator 性虐待者

ブレデターは「肉食動物」あるいは「略奪者」。マイケルはこれだったのか。

naive victim 世間知らずの犠牲者

naive は「純真な、だまされやすい」。あるいはこっちか。日本語の「ナイーブ」はどちらかといえいい意味で使われることの方が多く思うが、英語では軽蔑的に

使われることもよくある。支援者はマイケルをこう呼ぶが、そこには哀れむような、あるいはちょっと揶揄したような印象もある。

naive victim of a family of hardened liars

「ウソツキ家族の可哀想な犠牲者」

リーズナブル ダウト

reasonable doubt 合理的な疑い

結局8人の陪審員の結論は、「証拠はいかなる合理的な疑いを持つにも不十分だった」。

つまり証拠が、

there wasn't enough 「十分じゃなかった」(陪審員の一人の女性)

“I'm ecstatic.” 「有頂天ですよ」

評決を受けてのマイケルのスポークスマンの言葉。ecstatic は「あまりの高揚に我を忘れた状態」。

deserter 脱走兵

desert は名詞で「砂漠」ならデザートと発音するが、動詞では「(家族、職場を)見捨てる」でディザート。所属部隊から逃げ出す「脱走兵」の他にも、住民を見捨てた60年前の沖縄の日本兵とか、あるいは細川等々元総理とか、みんなディザーターである。

“Harrassed.” 「困惑している。」

故郷で母との40年振りの再会を果たしたジェンキンスさんが、現地で記者たちに囲まれて。「セクハラ」で日本語にもなっているが、動詞 harrass は「苦しめる、嫌がらせをする」。

ディスピカブル

despicable thing. 卑劣なこと

despicable は「卑しむべき、見下げ果てた」。かなり強い言葉だ。

ベトナム従軍経験があり、今回ジェンキンスさんと旧交を温めた幼なじみの一人は、彼のやったことをこう言い切っていた。

“He did wrong, I think, but that's all in the now.”

「彼は間違いをおかしたと思う、でも、みんなもう過去のことだよ」

やはり同じ町に住む退役軍人の言葉。どうやらこの意見が大勢のようだ。



私は、非常に狭い範囲でのみ行動するローカルに根差した人間である。あるいは、そういう風に思い込んでいる。バンドの名まえだってあさがやんずだしね。しかし、今時、杉並ローカルってどうなのよって気がすることも屢々。本場にそんなものが存在するのよ、と。例えば、地方の女子高生を取材した番組を見て、そこにいるのは、服装も喋り方も、近所で見掛ける女子高生と大差ない。おかし。高校入学時に同級生を見直し、杉並と練馬ってこんなに違うのか、と驚いたあの感覚は何だったのか。勿論、テレビの中の、地方の彼女たちと実際に同じクラスになってみれば、やっぱりいろいろと違うんだね、と納得することが多々あるのだろっけれど、ブラウン管を眺める限りでは、そこまでは判らない訳で、日本から物凄い勢いでローカルが消えつつあるのではないかと強く懸念。地方の諸君、それでいいの、と。

ネットを廃止し、世界との直接の交流を禁じます。続いて、携帯、固定、IPを問わず、あらゆる電話を廃止します。これによって、対面以外での会話は不可能になる訳であります。更に、エンジン、モーターなどの動力を用いた一切の乗り物を廃止します。今後は、徒歩、あるいは、自転車、駕籠などの方法での移動しか認めません。また、テレビ、ラジオなどの媒体は一億総白痴化のみならず一億均一化を招く元凶ですので、直ちに、使用を禁止します。刀狩りならぬテレビ狩りを行います。供出を拒むものは手打ちに致す。何となれば、杉並は杉並独自の道を進むのでありますからね。我儘言っただけじゃないよ。その代わりってこともないのだけれど、杉並製の物品は何であれ、区が助成致します。逆に、区外の製品には高額な税を課す所存であります。排他的なのだと批難されること必至であるけれど、杉並の独自性を押し進める為には致し方がない。最初はそれなりに不便を感じることもあるかもしれないけれど、なあと慣れてしまえば、どつとどつとどつともあるまい。どつしても嫌だてえ人はどつとどつと出ていきや良い

んだしね。こんなことをしたからって、すぐに効果が現れるとは思えないけれど、十年、二十年と日を追う毎に杉並独特の文化が生じる筈。後々の社会の教科書には善福寺川周辺に発達した杉並文明として記載されるようになるでしょう……などと筆の滑りに任せて、馬鹿なことを書いておられるけれど、私としては、強ち馬鹿なことだとはばかりは思っていない。寧ろ、そうなた方が、余程人間らしい生活を送れるのではないかと思ったり。ものは例に光回線を切断し、電話線を引っっこ抜き、携帯の電源を落として……と、まあ、口先だけなんだけどさ。仮に実行してみたとしても、本当に強い情報なら、ネットや電話がなくなっても、「口裂け女」の物語同様、口から口へと伝わって、やがて私の元にまで届く筈である。



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
 Facsimile : +81-3-3220-0640;
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
 篠崎健一アトリエ



万年筆なら dani

http://danijapan.com/

営業時間	平日・土曜日	11:30~15:00 / 17:30~25:00
日曜日		17:30~25:00
定休日	毎週火曜日 & 毎月第3日曜日	

中野区新井1-30-6 第1三層ビル1F
Tel : 03-5343-1316

bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事もできるShotBarです。ビール、パーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。

編集後記
 からす新聞第七巻六号(通巻第七十八号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇五年七月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野板上駅